

式 辞

1月に大雪に見舞われた福井も、3月に入り、春の気配が日に日に増してきているように思っています。

本日ここに、令和2年度、第72回福井県立高志高等学校「卒業証書授与式」を挙行するにあたり、PTA会長、岡田乃布彦様、同窓会会長、東郁雄様、並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、卒業生の皆さんを祝福できますことは、この上ない喜びであります。

卒業生、教職員を代表いたしまして、心からお礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与した245名の皆さん、卒業、おめでとう。

今日まで育ててくれたお父様、お母様、家族への感謝の気持ちを忘れることなく、高志高校の卒業生であることに自信と誇りを持って、それぞれのフィールドで、社会に貢献する人生を、歩んでください。

皆さんは、新型コロナウイルス感染症に負けずに、学校祭その他の学校行事を立派にやり遂げました。

大学入試改革が混乱をきたした中であって、しっかりと自らの目標に向かって努力の日々を過ごし、第3波の感染拡大が心配される真ただ中で、大学入学共通テスト、私立大学・国公立大学前期日程の受験をやりに切って、本日卒業式に臨んでいます。

皆さんの自己管理と継続的な努力に、改めて心から敬意と賛辞を表します。

皆さんへのお祝い、今後の人生への期待の言葉は、生徒会誌「みどり葉」の巻頭言に

も書きました。自宅に帰ったら、友達の原稿、学年主任、ホーム担任の先生の「贈る言葉」とともに、巻頭言にも目を通してください。

ここでは、2つのことについて話します。

1つめは、「世界を変える方法を考え、それを実行してみよう」ということです。

今から20年前に作られたある映画の中の話になります。

映画の冒頭で車の事故が起こり、1台の乗用車がめちゃくちゃになります。ぼうぜんと立ちつくす車の持ち主のところには、1人の紳士が現れ「代わりに私の車をあげるよ。ぜひ受け取ってほしい。」と車のキーを渡すのです。

場面は変わって、新学期の中学校の教室。

新しい担任のシモネット先生が「世界を変

える方法を考え、それを実行してみよう。」と板書し、それを今後一年間の課題にするという話をします。

その言葉を聞いた主人公のトレバー少年は、奇想天外な方法を考えつきます。見ず知らずの三人に何かの手助けをする。そして、その3人には、「僕にお礼をしなくてもいいから、僕とおなじように見ず知らずの3人に善意を示してほしい」と頼むことです。

実は、映画の冒頭のシーンは、教室の光景とは時間が前後していて、1人の紳士が車のキーをくれた場面は、トレバー少年が考えた善意の輪が広がって、トレバー少年から遠く離れたところで、別の人から受けた「善意」を、その紳士が、また別の人に渡した、映画のタイトルにもなった「ペイフオワード」した場面だったので。

生徒の皆さんの中には、どこかで聞いたことがあるような話と思った人がいるかも知

れません。高志中学校開校の年の、適性検査問題の、国語の大問1の問題文に、この映画の話題が取り上げられていました。

本日、卒業式場で内進生にだけ通じる話をするのは、私の本意ではありません。私がこの話をするのは、高入生も含めて、いえ、今日参列できなかった1、2年の在校生も含めて、もっというと高志中学校の生徒も含めて、高志高校・高志中学校で学ぶすべての生徒に、「世界を変える方法を考え、それを実行してみる」と「人々の善意を信じ、善意の輪を広げること」を期待しているからです。

今、世界では、国境を越えてひろがる環境問題や、感染症の問題、地域紛争や移民問題、途上国ばかりでなく、先進国にも蔓延する貧困問題など、問題が山積しています。

卒業生の皆さんは、これまでの学校生活を
通して、教科書や問題集などの正解のある
問題に取り組む学習だけでなく、正解のな
い問いに解をみつける学習にも取り組みま
した。

SSHやSGHの課題研究がそれでした。
課題研究自体は、発表会やレポート作成が
終わって区切りが付きましたが、あるテー
マについて探究し、自分なりの解を見つけ、
人々との議論を通じて、その解をブラッシ
ュアップする、そして、次の行動に移って
いくという「探究のプロセス」は、これか
らも続いていきます。

考えてみると、合唱コンクールや学校祭な
どの学校行事、部活動、生徒会活動も、正
解のない問いに解をみつける学習だったと
言えます。

皆さんが高志高校の3年間で経験した様々
なことは、実は、皆さんが大学や大学院を
出て、社会に出てから遭遇する、解決困難

な問題を克服するための、予行練習だった
と言っていると思います。

皆さんの手の中には、未来があります。

誰かが解決してくれるのを待つのではなく、
誰かが作った変化に順応するのでもなく、
皆さん自身で、変化を生み出しましょう。

「世界を変える方法を考え、それを実行し
てみましょう。」

その他大勢、普通の人々の集団に埋没する
のではなく、リスクをとって、勇気を出して、
挑戦する人生を歩みましょう。

トレバー少年のように、人々の善意を信じ、
恩返し（ペイ・バック）に留まらず、御送
り（ペイ・フォワード）する人の輪の中に
入りましょう。

そして、世界の人々を幸せにする人、困っ
ている人を支えられる人、あなたの隣の人
を笑顔にする人に、なってください。

2つ目は、母校を応援してほしいというこ

とです。

先ほど、卒業生代表として、橋本君に卒業証書を渡しました。

卒業証書には番号がついています。1組の五十嵐君は30215号、7組の渡辺君は30459号です。皆さんは、3万人を超える高志高校の同窓生の仲間入りをしたことになると思います。

皆さんは、皆さんの高校生活が、同窓会の先輩方の、数々の支援に支えられていたことを、知っていたでしょうか。

早朝や放課後、休日にも活用していた自習室、学習室の机や椅子、図書館前廊下の新聞書見台、部活動のトレーニング機器、1月の大雪のときに大活躍した除雪機など、学校生活の至るところに、同窓会の先輩方による支援の品々が存在しています。

国際交流事業には「母校応援ふるさと納税」による寄付が活用されています。

「みどり葉会」という同窓会の名前の通り、

卒業生と在校生のネットワークが、瑞々しい生命力をもつて、世界中に広がっていつてほしい、皆さんにも、その一翼を担ってほしいと、希望しています。

最後になりましたが、保護者の皆様には、お子様のご卒業、まことにおめでとうございます。

この世に生を受け、微笑むことしかできなかった赤ん坊の頃から、少しずつできることが増え、と同時に、怪我や病気等、テストの点数、進路実現等、心配なことも増える毎日だったのでないでしょうか。

小・中学校での生活、高志高校での生活を経て、お子様は、心も、身体も、立派に成長なさいました。保護者の皆様のお喜びは、いかばかりかと存じます。

また、これまで、本校にお寄せいただきました、格別のご理解と、ご協力に対しまして、教職員を代表して、お礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

卒業生諸君、お別れのときです。

皆さんの人生に幸多からんことを、心からお祈りして、式辞といたします。

令和三年三月二日

福井県立高志高等学校

校長 吉田 繁